

がくぶちょう べんめい
ツチャ学部長の弁明

さいきんうれ しんかんせん となり すわ よんじゅうだい おとこ
最近嬉しかったのは、新幹線で隣に座ったのが四十代の男だったことだ。

ひとな ちゅうねんおとこ きら いぜん となり おんな すわ
わたしだって人並みに中年男は嫌いだ。以前は、隣に女が座って
けることを希望していた。新幹線に乗るときは、たいてい仕事をしようと思
っているから、気になるような女が隣に座ったら、仕事に身が入らないは
ずだ。いいかえれば、仕事をしなくてすむはずだ。だが実際には、そういう希望
が実現したことはほとんどない。

わる よ なか おんないがい にんげん そんざい なか
悪いことに、世の中には女以外の人間も存在しており、中にはわたしの
あま ゆめ う くだ にんげん いちばんおお ぜんご せき さわ こ
甘い夢を打ち砕くような人間もいる。一番多いのは、前後の席で騒ぐ子
もである。子どもの声は大きいのは分かる。生物学的にいても、万一の
ばあい おや ちゅうい ひ こえ だ ひつよう となり おや
場合に親の注意を引くような声を出す必要があるのだ。だが、隣に親がい
るのになぜ大きい声を出す必要があるのか。(本当の親ではないのか?)。周
りの乗客に迷惑をかけるために大きい声をもっているとはしか思えない。
こ ちか しごと なに おむ
子どもが近くにいるときは、まず仕事にならない。何よりも、ぐっすり眠れ
ない。

けいけん なんかい かさ きつえんしゃりょう すわ
そういう経験が何回も重なり、わたしは、喫煙車両に座ることにした。

こ すく さいあく じたい さ
子どもは少ないから最悪の事態は避けられる……はずだった。

さいしょ きつえんしゃりょう の たいいくかいけい だいがくせい だんたい
最初に喫煙車両に乗ったとき、どこかの体育会系の大学生の団体が

まわ と こ こ いじょう おお こえ さわ
周りを取り込むようにすわり、子ども以上に大きい声で騒ぎまくった。

つぎ の こうれい おとこ となり すわ ろうじん さわ げんき
次に乗ったときは、高齢の男が隣に座った。老人なら騒ぐ元気もある

おも ろうじん となり すわ お すうじかん とぎ
まいと思ったが、老人は隣に座るなり、降りるまでの数時間、途切れるこ

はげ せき つづ かぜ はい し いま
となく激しい咳をし続けた。風邪なのか、肺ガンなのか知らないが、今にも

たお き き しごと
倒れそうで気が気でなく、仕事どころではなかった。

けいけん あと あま きぼう す かんが まわ ぼうりょく
この経験の後、わたしは甘い希望を捨てた。考えてみれば、周りに暴力

だん だんたい じんど かのうせい じたい ちゅうねんおとこ
団の団体が陣取る可能性もあるのだ。そういう事態に比べれば、中年男は

かんげい りんじん ちゅうねんおとこ どうちやく よじかん ねむ
歓迎すべき隣人だ。中年男でよかった。到着までの四時間、ぐっすり眠

ることができた。

(土屋賢二『ツチャ学部長の弁明』講談社)